

利根川下流域の新しい姿を目指して



河川リポーター 久我文吉さん

地域再生の 未来予想図

利根川舟運の歴史

利根川は、関東平野にまたがる大河川として、古くから人々にその名を知らしめてきた。その一方で「日本三大毒れ川」のひとつに称されるほど、大洪水を引き起こすため、時の統治者や近隣住民にとっては頭痛の種でもあった。江戸時代に入ると、戸田川や江戸湾に流れこんでいた利根川の流れを、熊野川に統合し、舟運の成長とともに、歴史的に大きく発展することになる。

結果、江戸と熊野の舟運の中間地点だった佐原（現佐原市）は、経済的に大きく発展することになる。舟運業の成長とともに、佐原には様々な文化や思想がもたらされ、単なる舟運の基地としての機能を越え、文化人を輩出する文化都市として成熟を遂げたのだ。

利根川下流管内図

明治以降に導入された蒸気船により、舟運はさかになる。開港期を迎え、利根川と江戸川を結ぶ利根運河が開通。だが、明治28年、総武線の本所～佐原間の鉄道開通後、鉄道・自動車による輸送が隆起するにつれ、利根川の舟運事業は徐々に衰退の一途を辿ってしまった。現在では、佐原に流れの小野川を中心に、木造家屋や土蔵などの江戸の情緒が漂う建造物や、河川や柳並木など江戸の街並みが見られる。舟運を中心とした観光事業が目ざされている。

舟運の盛んだった頃の様子（写真は船はぼつ丸）千葉県立中央博物館大利根分館所蔵



「毒れ川」と古くから恐れられる利根川。だが、養魚は30種類以上の魚や30種類以上の野草、川周辺に生育する自然を包み込む大川として、おだやかな表情を見せている。そんな利根川の魅力を体験すべく、佐原ドックから利根川下流域を散策することだ。ラインジャケットを身につけて、

水面から見た利根川

巡視船「はるかぜ」に乗る利根川。だが、養魚は30種類以上の魚や30種類以上の野草、川周辺に生育する自然を包み込む大川として、おだやかな表情を見せている。そんな利根川の魅力を体験すべく、佐原ドックから利根川下流域を散策することだ。ラインジャケットを身につけて、



佐原ドックから巡視船に乗る

佐原ドックを出て津宮を通り、いと、続けてまほ百羽というカモノをはじめとする渡り鳥たちが出会った。開けは、津宮付近は鳥類保護区に指定

利根川の舟運を復活させるため、地方自治体や市民団体によって、地域が主体となって現存している利根川舟運・地域づくり協議会は、利根川下流域沿川各町村の持つ観光資源を生かすこと、地域の活性化を目的としている。



小野川と歴史的な街並み

この「江戸復興」文化は、受容のままに現代でも受け継がれている。これらの文化財を中心に、佐原のまちおこし事業に携わるのが株式会社おひねりだ。

またおひねりが特に力を入れているのが、小野川沿岸の風景を小規模な船から眺められる舟遊事業。現在、大利根コース、小野川コースの2つのコースが、年中無休で運行中だ。

利根川の舟運を活かした地域の活性化を目指す

舟運の社会貢献を行っている。昨年10月には取手～佐原間、佐原～磯ヶ浦～潮来間、11月には佐原～熊野川、12月には印旛沼。今年の1月には宇治沼でモニタリングツアーを行った。調査結果によると、96%以上の回答者が、たいへん良かった、または、まあまあ良かったという評価をしていただいた。この調査からは、今後も舟遊事業を通じて、利根川を下りながら沿川の景色や情緒を楽しみたい、広域の町村が連携して良い事業を進めたいという声が多く寄せられている。

ため、水位調節を行う利根川開門が設置されている。河口堰を通り抜けるために開門の中に入る。長さ15m、高さ7mもある開門を遠近で見て、その大きさをうかがうことができる。水位調節時には船外に飛び出し、開門が閉まる様子を見たい、開門が閉まる様子を見て、船は開門を放り、利根川の下流へ。この河口堰が、海水の逆流を防ぐことで、塩害を防止し、生活用水として利根川の水を利用することが可能になっていることはあまり知られていない。自然環境だけではない、利根川の一面を垣間見たような感じがした。

調査後、久我さんが「観光地としてもっと多くの人に利根川を楽しんでほしいですね」といった。利根川に生息する数々の動植物に、新たな声と水を。そして、利根川が担う社会的役割。陸地から眺めた様子から想像しきれない、雄大な利根川の息吹を身に感じたい。最近感じた船旅だった。



重要文化財の利根川開門を出る利根川舟遊・地域づくり協議会のツアーの様子

「これまで海で船には何度も乗ったけれど、川にはじめてという河川リポーター(2008)とドックから見える景色の美しさに驚きを感じた。佐原ドックを離れ、ドックの方を見と、その周辺で行われている工事を目にとめる。この工事は、利根川事業では日本初のPFI事業(注)として行われている。佐原広域交流拠点PFI事業。約1年後の平成22年4月の開業を目指しており、開業するのが楽しみだ。

佐原ドックを出て津宮を通り、いと、続けてまほ百羽というカモノをはじめとする渡り鳥たちが出会った。開けは、津宮付近は鳥類保護区に指定

利根川の舟運を復活させるため、地方自治体や市民団体によって、地域が主体となって現存している利根川舟運・地域づくり協議会は、利根川下流域沿川各町村の持つ観光資源を生かすこと、地域の活性化を目的としている。

この「江戸復興」文化は、受容のままに現代でも受け継がれている。これらの文化財を中心に、佐原のまちおこし事業に携わるのが株式会社おひねりだ。

またおひねりが特に力を入れているのが、小野川沿岸の風景を小規模な船から眺められる舟遊事業。現在、大利根コース、小野川コースの2つのコースが、年中無休で運行中だ。



自然豊かな利根川と広大な空



鳥獣保護区(香取市津宮)



新設魚道の完成イメージ図

環境に配慮した多自然魚道整備

広大な流域面積と豊かな自然環境ゆえに、数多くの生命のすみかとなっている利根川。その利根川の環境をより改善するため、利根川河口堰に新たに「多自然魚道」が設置される。完成は2010年度が予定されている。

利根川河口堰の魚道が、最初に設置されたのは昭和49年。河口堰設置の際、当時の知見を参考に意見交換した結果、呼び水階段式魚道を設置した。しかし、この魚道は、サケやアユなどの遡流力の強い魚を対象としたものであった。

そして、近年、この呼び水階段式魚道の老朽化が目立つようになったため、改良することになった。それに併せて、環境を重視する時代背景から、新たに「多自然魚道」と呼ばれる階段式魚道が設置されることとなった。石などを使い、自然環境により配慮した「多自然魚道」が設置されれば、遡流力の弱い魚やエビ・カニなども通しやすくなる。

魚道が完成して通る魚が増えれば、河口堰ができる以前の利根川に近い状態に戻っていく日もそう遠くはないかもしれない。



改良される魚道